

# 超高齢社会への準備

## ～特別養護老人ホームへの福祉ボランティア～

代表者 宮本 郁 (法学部法学科3年)

### 1. 目的と概要

現在日本は超高齢社会を迎えています。今後はますます高齢者の割合は増加し、社会福祉への関心は高まるでしょう。このプロジェクト事業では、そのような現状を踏まえ、今まで各人がそれぞれに身につけてきたボランティア活動や社会福祉に関する知識をメンバー全員で共有し、養護老人ホームでのボランティアに役立てながら、さらに理解を深めることを目的としています。

### 2. 実施期間（実施日）

平成20年5月7日 から 平成21年1月14日まで

### 3. 成果の内容及びその分析・評価等

主な活動内容は、毎週水曜日の午後、高松市宮脇町にある「社会福祉法人さぬき」が運営する養護老人ホームを訪問し、入所者の方々と会話をしたり、売店のお手伝いをしたりすることでした。年代の違う入所者の方々と会話をするきっかけを作るのは難しく、また、会話をしながらも周囲の方々の様子にも気を配らなければならないので、最初は上手く立ち回れず戸惑いました。しかし、回を重ねるごとに積極的に声をかけられるようになり、入所者の方々にお茶を配ったり、一緒に食器の片付けをしたりするほど打ち解けることができました。また、売店のお手伝いでは、入所者の方々に分かりやすいように商品の値段を書いたり、商品を並べたりしました。

その他、施設で七夕などのレクリエーションが行われる場合には、その準備のお手伝いをさせていただきました。さらに、施設の掃除、喫茶のお手伝いや折り紙を一緒に折ったりもしました。平成20年12月には、プロジェクトメンバーが主体となってクリスマス会を開催しました。クリスマス会には養護老人ホームの入所者の方々だけでなく、特別養護老人ホームの入所者の方々も参加して下さり、多くの方々に楽しんでいただくことができました。

しかし、プロジェクトメンバーのほとんどが3年生であり、就職活動を行う都合上、平成21年に入ってからはメンバー全員でボランティア活動を行うことが困難になりました。そのため、平成21年1月14日を最後に、このプロジェクトを終了することになりました。今後は、この

プロジェクトを通して学んだことを活かしつつ、各人が個別にボランティア活動を行う予定です。

次に、経費の用途ですが、今回はメンバー全員のエプロンと上履きの購入に使用しました。これは、全員が同じエプロンや上履きを使用することにより、入所者の方々に「香川大学の学生が訪問している」と認識していただくためのユニフォームのような役割を期待したからです。スーツやユニフォーム等のきっちりとした服装で訪問しますと、動きにくかったり、入所者の方々に緊張感を与えたりしてしまいます。また、入所者の方々にとっては家であるホームに他人が入ってくる、という印象を与えかねないということもあり、今回はエプロンを選びました。全員が同じエプロンを着用していることについて入所者の方から指摘され、会話のきっかけが出来たということもあり、予想以上にこの試みは成功したと感じました。

#### 4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

高齢者ボランティアは、ホームへボランティアの申し込みを行う必要があり、また、ちょっとした不注意で高齢者の方々の命を危険にさらしてしまう危険があるため、気軽に参加できるタイプのボランティアではありません。そのような現状をふまえると、当プロジェクトは高齢者ボランティアに興味を持っていたプロジェクトメンバーにとって、入り口を開く役割を果たせたと考えています。当プロジェクトでは、ボランティアを始める前にメンバー全員がボランティア保険に加入し、職員の方から注意事項を教えていただいた上でボランティアを行いました。この二点を守ることにより、香川大学と「さぬき」という養護老人ホームとのつながりや、プロジェクトメンバーとホームの職員の方々とのつながりを築くことが出来ました。このつながりは、今後、プロジェクトメンバーがそれぞれにボランティアを行う場合や、新たに高齢者ボランティアに興味を持った人にとって、とても意味のあるものとなるでしょう。

#### 5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

活動全体を通して痛感したのは、世代の異なる入所者の方々とのコミュニケーションの難しさでした。前年度、当プロジェクトを行った先輩方や職員の方からアドバイスをいただいたのですが、なかなか会話が上手いかず落ち込むこともありました。特に会話のきっかけをつかむのが難しかったです。世代の異なる方とのコミュニケーション能力は、今後、就職活動を行う場合や、社会に出て働く場合にも重要となるスキルだと考えます。就職活動を目前にした時期に、コミュニケーションの大切さ・難しさを再認識し、自分に足りないものは何か考えられたことは、とても貴重な体験となりました。

また、車椅子の扱い方や、車椅子を動かす際の注意点を職員の方からご指導いただき、実際に車椅子に乗った方の移動のお手伝いをすることもありました。車椅子に乗っている方にとっては、時に私たちの何気ない行動に不安を感じるということを教えていただきました。ただ闇雲に気を配るのではなく、適切などころに適切な配慮が必要なのだということを学びました。

当プロジェクトを通して学んだこと・気づいたことは、高齢者の方に対してだけでなく、どんな世代の人と接するときにも重要となることばかりだと考えています。大学生活の中で、同

年代の友人と接しているだけでは気付けなかったことに気付くことができました。さらに、プロジェクトメンバーが当プロジェクト以外のボランティアにも積極的に参加するといった変化もみられています。以上のことから、「各人が持っている知識をメンバー全員が共有し、当プロジェクトに役立てながらさらに理解を深める」という目的が達成できたと考えています。

## 6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

反省点としては、二点挙げることができます。一つ目は、ボランティアへの参加者が限られていたことです。当プロジェクトも今年度で4年目を迎えるため、法学部内での認知度は高まっていると思われます。参加者の人数も前年度よりやや増加しました。しかし、前年度に引き続き、参加者が限られるという問題は解決しませんでした。その原因としては、実施メンバーが継続的にボランティア活動を行っているため、継続が難しい人は参加しにくい雰囲気を作ってしまったのではないかと考えられます。今後は、継続が難しい人にも気軽に参加してもらえるような雰囲気づくりや呼びかけを行うなど、今年度よりも積極的に参加者を募集する必要があると感じました。

反面、メンバーが全員継続してボランティアを行うことが可能だと団結しやすいという感想を持ったのも事実です。平成20年12月に行ったクリスマス会は2か月前から企画し、準備も協力して行うことができました。入所者の方とのコミュニケーションに苦戦していたメンバーも、積極的に話しかけたり周囲に気を配ったりすることができ、それぞれに成長できたように思いました。

二つ目は、当初目標としていた「地域ボランティアセンター香川大学支部」を設立できなかったことです。ここでいう「ボランティアセンター」とは、既存のボランティアセンターとは異なり、香川大学内のボランティアグループや香川県内の大学のボランティアグループと連携を図るということを目的としています。設立に向け、既存のボランティアセンターを見学するなどの準備はしていたものの、実行に移せなかったことが残念です。見通しの甘さと、支部設立に必要なことに対する知識不足が原因だと考えています。来年度以降は、物事を性急に進めようとするのではなく、支部設立に向けての実績を積み重ねていきたいです。

最後になりましたが、この度は当プロジェクトにご支援下さり、本当に有難うございました。

## 7. 実施メンバー

代表者 宮本 郁（法学部3年）

構成員 安東 美緒（法学部3年）

奥田 晃紀（法学部3年）

蟹江 真俊（法学部4年）

北内 優（法学部3年）

伊達 毅（法学部3年）

豊島 真衣（法学部3年）

中川ひとみ（法学部3年）

藤田 翔子（法学部3年）

前川 志保（法学部3年）

山下 洋司（法学部3年）

渡辺 華奈（法学部3年）